

島村鼎甫——その業績と記録——

津 下 健 哉

島村鼎甫は天保元年備前沼村にて津下古庵の次男として生れる。兄に津下精齊あり、適塾には弟に遅れて安政五年入門（no四五二）弟、鼎甫は幼名亮二、四歳にして伯叔母方に養子となり島村氏を冒す。姫路の仁寿山校、および大阪後藤松陰に学ぶ。

嘉永五年 二三才で適塾入門（no二四六）同期に大島圭介、坪井信友など三四名。成績優良にして一年で全科を卒業。語学拔群。京都の赤澤寛輔に迎えられて塾頭となる。

嘉永六年 自ら『診即稿本』を訳し金若干を得、二四才で東行して伊東玄朴につく。

安政元年 阿波侯の聘に応じ侍医となる、二五人扶持。

安政四年 オランダ陸軍士官学校刊行の撤兵教練書『撤

兵演式』を訳し発刊する。

安政五年末か六年初め頃 福沢諭吉江戸に出て鼎甫を訪ねる。（福翁自伝）「江戸ニ学ニ非ズ教ウルナリ。鼎甫翻訳中—原書ヲ持チ出シ、コノ文ノ一節ガ判ラヌト言フ。凡ソ半時間バカリ考ヘテ—判ッテミルト造作ノナイモノト主客共ニ喜ブ。」

安政五年五月 お玉ヶ池種痘所—抛金八三名。大槻、伊東、戸塚らの中に鼎甫の名あり。

文久二年 緒方洪庵が江戸医学所頭取となる。鼎甫、石井信義同所教授となる。

文久三年六月一〇日 緒方洪庵の死—高林寺に葬る。在京門弟多数あつまる。八重の日記の六月一六日の項に「島村つや参る」の記載あり。洪庵の死後医学所の陣容—松本良順（内科）坪井芳州（薬剤）鼎甫（生理）石井信義（病理）桐原玄海（解剖）、句読師—足立寛、田代一徳ら、（石黒忠のり—懐旧九十年）のごとくになる。

慶応二年 『生理発蒙』全一四刊を発刊す。富士川游博士によれば『慶応二年島村鼎甫が生理発蒙一四巻を著し、リバックの書を訳し、之を世に行うに及び、生理の学は始

めて普ねく世医の知る所となるに至れり」と。

慶応二年 『創夷新説』全五巻を出版。刀傷、刺傷、裂傷、挫傷、砲傷、咬傷など。但し後三巻は未見。これ等は戊辰の役にも使用されたようである(関寛斎)。

明治元年 旧幕府の医学教職を挙げて助教とし、生徒を教育せしむ。教授任命一二月一〇日。

明治二年 石神良策が医学所取締りとなり、戊辰の役で活躍した英人ウイリスに講義をせしめた。司馬俊海訳の『日講紀聞』を発刊、鼎甫(小博士)題言に言う。「……学校ノ規律未タ全ク立ズ、漸ク今夏秋ノ際ニ至リテ……教師又始テ暇ヲ得ルニ隋テ、此ニ毎朝講筵ヲ開キ其ノ説ヲ筆記シ……日講記聞トス」。ウイリスの手紙に鼎甫の名あり。

この年、相良、岩佐が医学取調御用係となり日本医学の進路を英語か独乙語かに決定することとなる。坪井、島村、石井らは英語を希望していたようである(東京大学百年史)が、しかしドイツ語に決定する事となる。

明治三年 抱独英口授の『日講紀聞』発刊―島村小博士題言に言う。「偉利士ノ我東校ヲ去ル。普魯社医官未タ来ラス。生徒大ニ失望ス。時ニ大阪医校ノ抱独英氏今秋代満

ノ期ニ当リ已ニ横浜ニ来ルニ会フ。老翁涙ヲ岳テ固辞ス。然レドモ……」。

明治四年 鼎甫東校中教授となる。明治五年 桑田衡平訳の『華氏内科摘要』二二冊が発刊されるが数冊につき鼎甫の校閲がなされている。

明治七年 石井信義の日記には鼎甫との交友が詳しい。当時の月給一五〇円、この年の二月一二日編書課長(文部省)となるも九月一四日相良、坪井、島村、石井と共に仕御免、位記返上となる。松香私志で長与専齊は「省内の刷新を謀り大小丞以下能免の人も少からず、相良、島村、石井、坪井などの人々も亦其中にあり、交友の情誼いたく心に掛かりける折りから、意外にも相良校長の後任は余にくだりて……やるせなく」の語あり。

明治八年 坪井、石井訳の「丹氏医療大成」発刊、三巻以降鼎甫翻訳に加わる。この年六月一〇日 洪庵一三回忌、出席者三八名。中に鼎甫の名あり。明治九年六月一〇日 洪庵一四回忌の時の写真には四七歳の鼎甫が写っている。

明治一二―三年 卒中に罹り福沢諭吉が代筆の手紙を書

く。「昨年以來主人も大病にて実は健忘同様の始末、訳書出来候とも出版の見込も無之、当惑の次第なり。兎に角にこの跡の訳は断然御見合被下度。主人病氣に付、福沢諭吉代筆如此御座候」(福沢諭吉伝) 起居不自由となり屋敷を矢野二郎に売却。愛たご下に転居。

明治一四年二月五二歳で死亡。上野谷中霊園に葬る。子なく中村家より俊一を養子とす。島村俊一は京都府立医大五代校長、精神科教授で京都府立医大の再建、大学昇格に尽くす。大正一二年六三歳で死亡、鼎甫の横に眠る。

以上は鼎甫の断片的記録の寄せ集めである。同時代に活躍した他の人々に比し知られる所が少ないが短命であったこともさることながら、検証の少ないことにもよると思われる。

(広島県立身体障害者リハビリテーション・センター)

眼科医 丸尾興堂の家系

丸尾 馨、奥沢 康正

遠州、丸尾復明館、丸尾興堂の家系は、興堂の三代前の丸尾兵三郎を祖とする。丸尾家は現在の静岡県城東郡池新田村で代々農業を営んでいたというが、医家としての丸尾家は、兵三郎の長男(名前不詳)が農業を嫌い、弟に家督を譲って医をもって業としたことに始まる。

兵三郎の長男(初代)には家督を継ぐべき長子が居らず、新宮良益(静岡浅間神社の神官の三男)に姪を娶らせて養子として丸尾家を継がせた。二代、良益(後に曠益と改める)は眼科医として大いに名をあげ、藩主から「復明館」の三字を賜り、復明館眼科を名乗って隆盛を極め、後裔は各地に散らばり活躍した。以後、その家系の中に多くの眼科医、並びに諸科の医師を輩出した。